勇者が魔王

Ｊ・クラスコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者が魔王

【Ｎコード】

Ｎ２３７４ＢＡ

【作者名】

Ｊ・クラスコ

【あらすじ】

少年アダムやその仲間たちの少しうざったい冒険譚。

プロローグ（前書き）

ゆるーり投稿したいと思います。

プロローグ

ぼくは世間からは勇者様と崇められているが、己自身を大層な人間だとは思っていない。言ってみれば少しだけ武勇の心得があるだけの、取るに足らぬ大衆の一人であるようにしか思えない。

しかし人々から期待を負わされている以上、それ相応の期待に応えうるだけの能力は備わっているはずなのだ。それの正体がなんなのか、客観的に見ればわかる――とも限らない。人というやつは内面にも外面にも表れない複雑な事情じみたものを持っている――というのがぼくの私見である。

そう、その事情が肝心のぼくを英雄たらしめているなんかなのだ。ぼくはなんとしてでもこの「なんか」を研究し、解明したいと思う。

ぼくは率直にいってイケメンであった。昔からちまたでは有名の美少年と誉めそやされてきたし、女の子たちだって黄色い声を上げながらぼくにたかってきた。なよなよしててまるで女のようだなと同年代の男の子にからかわれたこともあるし、人さらいにも合いかけた。

よってぼくはただのイケメンではない。並大抵の人ではしえない経験豊富のイケメンなのだ。

誰がぼくをイケメンではないと否定できようか。姿見に映し出されたぼくの姿が、なによりもぼくがイケメンであることを雄弁に物語っているではないか。

サラっとした艶のあるブロンド、深緑の瞳、均整の取れた目鼻立ち。いつ見ても素晴らしいシンメトリーだ。あとは年齢を重ねて第二成長期に突入して身長をすらりと伸ばすのみ。

「とっととおめかし終わらせろよ、アダム君」

おや、仲間Ａを待たせていたようだ。出口に目をやれば、目の前には黒髪の青年が腕を組んで視界を覆うように立っている。無論ぼくのほうがイケメンである。

いや、それよりもこいつはいつからこの部屋にいたんだ。扉の鍵はきっちりかけておいたはずなのだが。

「おまえがあまりに遅いもんだから、待ちくたびれて扉を蹴破ってしまったぜ」

あ、本当だ。あの床にバラバラにまき散らされている木の破片がそうか。当時の凄まじさを想像するのはたやすいが、その凄まじさ相応の鋭い破壊音が聞こえなかったのはぼくが思考に耽っていたからかもしれない。

それにしてもこの男、人の許可もえずになんという強行手段にでているのだ。ぼくは一瞬ぶん殴ってやりたい衝動に駆られるが、この脅威の破壊力と体格差からして逆手を取られるのがオチである。体格のよいこの男の身長を抜くことが、ぼくの密かな願望である。その時には必ず報復を受けてもらおうかな。

「君が修理代払っておけよ、リネン君。そうしたらぼくは君を恨まずにいられるんだけどね」

ここは旅先の宿。自分の家ではない。

暗にしばらくここで働けといってやったのだ。なぜって路銀が底を尽きそうだからね。どう考えたって誰から見てもあの惨状はこいつの責任だしね。

「じゃあ一生恨んでな」

この野郎、そのつもりらしい。
ぼくはけちょんけちょんにやりこめたい衝動に駆られるが、急いで自制心を置く。ぼくが感情的になったらきっとこの愚かで馬鹿力の男は高確率で魂を狙いにくるに違いないからね。

「あのねえ、リネン君。ぼくは君の為を思って言ってやってるのだがね」

これを機に彼も更正するかもしれないと思った。もはやぼくの中では、彼の存在自体が脅迫である。こいつは武力をもってなにもかも解決したがるとんでもないやつだからな。

「ふん、おまえなんぞに助言されるまでもないぜ」

彼は悪魔的な強気の笑みを浮かべる。彼の目力の利いた顔に上乗せされれば、結構な凄みが放たれる。こいつがこの顔色になる時はたいがい不満を持っている時だから、じつにややこしくて面倒くさかった。なんかもうつき合うのが嫌になってくる。

「ここの主人を今から潰しにいくか」

訂正。
こいつは魔王だ。

1（前書き）

アダム、罪を負わされる。

1

ログス・エクシール。それがこの大陸の名だ。
現時点で大陸地図に載せられている国の数はおよそ百三十。その内列強とされる大国が六つある。
物語はその六つの内の一つ、トリア人の支配する国カローリのとある地方から始まる。

リネン、リネン、リネン。
この黒髪の男と会ってからまだ日は浅い。でも今ではどういうわけか、この男と一緒に行動するようになっていた。これが成り行きというやつなのだろう。
ぼくより二つ年上の十五歳らしい――――聞いてもないのに彼が勝手に教えてくれた――――が、その酒豪ぶりはバーで気ちがいを起こしているいい大人よりもたちが悪い。たまに、酒で溺れ死んでしまわないかなーなどと不謹慎ながらも切実に願ってしまう時があるのだが、それ程までにとにかくひどいのだ。
ぼくは一体なにを間違ってこの男と行動をともにするようになってしまったのだろうか。出会いがじつに最悪だったことだけは記憶に新しいが、今となっては自分の正気を疑ってしまう。
時刻でいうと昼間のあたりだろうか。ぼくはちょうど今、とある宿の周辺をホウキでけだるげに掃いている。いや、正確には掃かされている。
ぼくたちはこの宿に一日だけ宿泊する予定だったのだが、リネンの馬鹿がやらかして悪い意味で長居することになってしまったのだ。罰として科せられたのは、損害費用分の雑用。あてがわれた寝床は物置。

そして肝心のリネンはというと、すべての責任をぼくに押しつけるようにして忽然と姿を消してしまった。まさかこんな形で別れることになるとは、このやり場のない胸のもどかしさをどうしてくれようか。

せめてあいつの頭に一発お見舞いしたかった。さんざん人を振り回しておいてしまいには放置とか、畜生のやることじゃないか。でもあいつから解放されただけマシと言えるかな。

「ようお嬢ちゃん。掃除とはまじめだねえ」

宿屋の入り口から中年の客らしき男が出てきて、にこやかに、一切の悪意なくぼくに話かけてきた。どうせ宿屋の亭主の娘かなんかと勘違いしているのだろう。はあ、また相手に訂正させなければ。顔がキレイすぎるとこういう損もある。

「おじさん、ぼくは男なんだけど」

「なに！？　それはすまなかったな」

おじさんはびっくり仰天だ。面倒くさいと言えば面倒くさいけど、ぼくが男だとわかった時の相手の反応を眺めるのも結構オツだったりする。まあ一応ぼくは男ものの服装をしているから、大体の人には気づいてもらえる。たまに鈍い人や病的にうたぐり深い人が現れると手間がかかるのだけど。

誤解もあっさり解け、おじさんは町の大通りの方角へと消えていった。

この町には三つの宿泊屋があるらしいが、その中でここが一番ぼくには適当で格安だった。当時の手持ちが三百六十ルーペだとしたら、一日分の宿泊費は食事をつけて二百五十ルーペ。食事なしであれば百九十ルーペ程度に抑えることができる。

ぼくは腹の虫を黙らせて食事なしに甘んじた。無論ケチってるわ

けではなく、出費を抑える為だ。あの男さえいなければうまくやり繰りできていたところなんだけどね。あの野郎、ぼくをヒモ同様に扱った。

でもこれを好機にあの男との一切の関係が断たれたと思えば、浮き立つ心も抑えつけられない。掃除ですら楽しくなってくる。

さっさと扉の分を弁償し、この町から出ていこうではないか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2374ba/

勇者が魔王

2012年1月6日11時45分発行